R. M. Rilke

Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge · Rodin

マルテの手記・ロダン

R. M. リルケ
大山定一・手塚富雄
高橋義孝・富士川英郎
谷友幸・高安國世
石中象治・堀辰雄
譯

現代世界文學全集
6

新潮社版

現代世界文學全集 6
マルテの手記・ロダン

昭和二十八年一月二十七日 印刷
昭和二十八年一月三十一日 發行

定價 參百五拾圓
地方價 參百六拾圓

譯者 大山定一 谷友幸 手塚富雄 高安國世 高橋義孝 石中象治 富士川英郎 堀辰雄

發行者 東京都新宿區矢來町七一 佐藤義夫

發行所 東京都新宿區矢來町七一 新潮社
電話九段(33)二二一—二五番
振替東京八〇八番

大日本印刷株式會社
Printed in Japan

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

リルケの生涯と作品

ライナー・マリア・リルケは一八七五年十二月四日、ボヘミヤの古都プラークに生れた。當時のプラークはオーストリア・ハンガリア領である。リルケの家はケルンテン地方の古いドイツ貴族で、それがザクセンを經て、ボヘミヤに移住したと言はれてゐる。しかし、このことについての文獻的確證はない。リルケ自身はかたく體内の「貴族の血」を信じた。むしろリルケは、しひて自己の内部の高貴な血を信じようとした。ドレースデン州立圖書館所藏の一枚の古文書の記錄から「旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌」を書いたのも、彼が自己の血統と系譜を文學的に確證してみたいといふ悲しい念願だつたのかもしれぬ。

リルケの父ヨーゼフ（一八三八年生）は、一八五九年の伊墺戰爭に士官候補生として出征した軍人である。彼は健康すぐれず、退役後は或る鐵道會社に勤めてゐた。母はゾフィー、舊姓エンツといふ。詩人が九歲のとき、すでに兩親が別居してしまつたのをみても、ほぼリルケをとりまく家庭生活の雰圍氣が想像できるだらう。彼は決して明るい幸福な少年ではなかつた。母親はまるで女兒のやうに彼を育てた。スカートのある女兒服をきた幼年時代の寫眞が殘されてゐるやうに、リルケは異樣な幼年時代をおくつたらしい。しかも、父親は一度やぶれた自分の夢を再現させようと、息子をザンクト・ペルテンの陸軍幼年學校に入學させたのである。

リルケはプラークに生れながら、ほとんど一語もチェコ語を話さない。純粹に彼はドイツ人の教育をうけた。リル

ケは生れたその日から、すでにもう故郷を失つてゐたと言つてよいかもしれぬ。彼は家を持たなかつた。播かれた種子が根をおろす溫い土壤を持たなかつた。初期のリルケの詩は、しばしばプラークの風物をうたふが、それには「鄕土」といふ素朴な强靱な感情がすこしもみられない。ただ單なる感傷と悲哀のひびきだけである。ジャン・カスーは、パリの街頭をさまよふ後年のリルケの後姿をかう書いた。「リルケは中部ヨーロッパ人が着るラグラン型の外套を身につけてゐた。彼はやつて來た遠い國の外套をそのまま着てゐたのだ。しかし、却つてそれがまぎれもなく故鄕を失つた人間の後ろすがただつた。マルテ・ラウリッツ・ブリッゲがパリを歩いたすがたも、おそらくこのとほりだつたにちがひない。」

リルケはザンクト・ペルテンから、やがてメーリッシュ・ワイスキルヘンの陸軍士官學校に進學した。無慙な兵學校生活が、一八八六年から一八九一年までつづいてゐる。しかし、リルケは病身のゆゑで、やがて退學をゆるされた。將來の方針を立てなほすために彼はリンツの高等商業學校へ入學するが、一八九二年、中途でまたその學校を去つてしまつた。ふたたびプラークに歸つて、リルケはあらためて高等學校の卒業試驗を了へ、プラーク大學に籍をおくのである。一八九六年九月、リルケはプラークを去つてミュンヘン大學の學生となつた。リルケの生涯の長い彷徨はここからはじまつてゐる。われわれは一八九六年で、リルケの青年時代に終止符を打つことができると考へてよい。リルケは「人生と唄」(一八九四年)、「家神奉幣」などの詩集をすでに出版してゐた。だが、これらの淡々しい作品から、ただちにその後の偉大な詩人の出生を豫想することは困難である。(「家神奉幣」一八九六年、「夢の冠」一八九七年、「キリスト降臨節」一八九八年の三詩集をまとめて、リルケは一九一三年に「第一詩集」を編む。)

ミュンヘン時代は、リルケの作家活動がやうやく習作時代を通過したことを示してゐるかのやうである。外面的にも內面的にも、初めてリルケの「空間」が自由と開放の「ひろがり」を獲得したのだ。「キリスト降臨節」は、リルケ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

その人の歌口がきこえてゐる。當時の文壇的風潮であつた「自然主義」や「印象主義」に埋沒せぬ詩人の「肉聲」がある。このとき、リルケのポエジイの自覺に非常な影響をおよぼしたヤコブセンの存在は忘れてならぬだらう。心理の翳りに深い、微妙獨特な、あの身ぢかさと仄かなあたたかみは、リルケがヤコブセンから學んだ貴重な收穫だつた。リルケはのちにヤコブセンの評傳を書かうと企てたこともあるやうに、しばしば手紙のなかで彼の文體に言及した。ことに「若き詩人への手紙」は、リルケが單なる主觀の曖昧模糊たるゆめから、いかにして靜かな現實の眼をひらき、いかにして自己內部の、纖細な、名づけがたいものの對應を、外界の風や木の葉や光のなかに見出すにいたるかといふ、方法論的自覺を告白してゐる。リルケの言葉は一そう深くなり、リズムがながれる水のやうに動いて、やうやく最初の「リルケ調」らしいものを創出した。短篇集「人生のほとりを」(一八九八年)にもやはりヤコブセンの影響はまざまざと窺はれるであらう。(たとへば「純白の幸福」「聲」「和む」など)

「わが祝ひに」(一八九九年、のちに改訂して「初期詩集」一九〇九年)は、本來の意味におけるリルケの抒情詩の出發であつた。リルケのポエジイが初めてリルケ自身と對決した。すなはち、「神」と、「死」と、「物たち」と對決した。

わたしのいのちが何につながるかを
誰が知つてゐるでせう
吹く風のなかでわたしは呼んでゐないでせうか
池の波とわたしはゆれてゐないでせうか
わたしの現身(うつせみ)が早春の寒さに凍(こゞ)える
蒼ざめた一本の白樺でないでせうか

とれがいはばリルケのたましひの「空間」だつた。一つの「物」、一つの形、そして意味、感情、言葉、文體、造形

的フォルム――すべてが自在に入りまじり、變化し、かすかにふれ合つてゐるのだ。このやうな詩人の無垢の獻身、はてしのない謙讓と無心の自己放棄。詩人の言葉が白い空の雲や川のさざ波や禽獸や樹木などと一つにとけて、ともにふるへ、ともにかすかに搖れてゐる。ゲオルゲはリルケと會つた最初の日に、あなたはあまりに早く詩を書きすぎたと言つたが、やうやくここにきて、いはゆる「リルケ調」がリルケのポエジイの明確な根本態度として決定されたといつてよい。もともと詩人の根本態度は不變であらうし、變つてはならぬものである。なぜなら、それは何かわからぬ內部の抑壓や閉塞から自己をひらかうとする、必然な、唯一の方法なのだから。ことばをかへていへば、それは詩人のたましひの救濟なのだから。

一八九九年には「わが祝ひに」の出版と同時に「時禱詩集」の第一部「僧院生活の書」が書かれてゐる。リルケはそれを、第二部「巡禮の書」(一九〇一年)、第三部「貧困と死の書」(一九〇三年)とあはせて、一九〇五年に出版した。「時禱詩集」はもはやまぎれもなくリルケ的體驗の昇華だといはねばならぬ。リルケの體驗を貫流してゐる三つの大きな精神の河があつた。一つの河は東から來る「ロシア體驗」である。もう一つは北から來る流れで、ヤコブセンはその重大な要素の一つだといつてよい。さらにまた西から來る「パリ體驗」がある。

リルケは二度ロシアを旅行した。一八九九年と一九〇〇年、いづれも春である。二回とも彼はトルストイを訪ねた。モスコウ、ペーテルスブルク、キエフなどに滯在した。モスコウの暗い夜あけの空にひびく復活祭の鐘の音は、いはばリルケのたましひの復活だつた。リルケはロシアを「こころの故鄕」とよんだ。ロシアの廣漠たる平野。土に生きる素朴な、忍耐づよい人々。リルケの「空間體驗」と「神の體驗」が一つに融け合ひ、おなじ意味をかさねるのが、リルケのロシアといふエレメントだらう。神はどこをさがしてもゐない。ただ空漠たる空間のひろがりばかりである。神は死んだのではない。ぼくらの神は、いつか、どこからか、かならずやつてくるのである。かくして「時禱

詩集」第一部と「神さまの話」(一九〇〇年)が生れた。ロシア體驗は、リルケのたましひとスラヴのたましひとの比較や親近さが問題であるよりも、むしろリルケがロシアによつて、いかに「無限」といふものを知覺したか、いかに「悠久」といふものをぢかに身にふれて感じたかが、大切な考察の中心にならねばならぬ。どこまでも果てしなくひろがるロシアの天と地。リルケは書いてゐる、「ロシアの人々は深さと暗黑に生きてゐる、そして寡默だ」と。

一九〇〇年から一九〇二年まで、リルケはロシアから歸つてブレーメンに近いヴォルプスヴェーデといふ畫家たちのさびしい村に住んだ。ヴォルプスヴェーデの生活は、たぶんロシア體驗の補足と充實であるとみてよいだらう。それはリューネブルガー・ハイデといふ曠野のなかに置かれたちひさな村である。何となくロシアを思はすやうな一帶の起伏のない平原。白い雲とひろい空と木立。「天地、といふのは二つの言葉に相違ないが、それはもともとただ一つの體驗しか意味しない。すなはち、平野といふ體驗を。平野は、成長しながら次第にひろがつてゆくぼくらの生きた感情だ」とリルケは「ヴォルプスヴェーデ」(一九〇三年)に書いた。そしてリルケは、フォーゲラーやパウラ・ベッカーなどの畫家たちと毎日往來した。リルケは畫家の眼で、じつと現實の形象を凝視することをまなびはじめたのである。ただ文學的な、ただ抒情的なものにのみとどまらず、彼はあやまりなく物のかたちや線を捕へようと努力した。すでに「形象詩集」(一九〇二年)といふ詩集の標題が、リルケの一すぢな意志を語つてゐるといはねばならぬ。かかる「物象詩」への道は、さらにロダンといふ藝術の偉大な師を得て、窮極にまで登りつめてゆくだらう。「新詩集」(第一部一九〇七年、第二部一九〇八年)がそれである。ヴォルプスヴェーデの印象畫家的イメージが、ロダンといふ彫刻的造形にみちびかれて、いつそう明確なフォルムに高められるのだ。リルケは一九〇一年、女流彫刻家クララ・ウェストフ(一八七八年生)と結婚した。まもなく長女ルートが生れた。當時リルケはヴォルプスヴェーデに近いウェスターヴェーデに新居をかまへてゐた。

一九〇二年八月、リルケはパリに到着した。彼はただひとりだつた。遠くに妻と子を殘したまま、彼は孤獨なパリ生活をはじめた。パリ時代はリルケの內面的・外面的發展に最も重大な意味をもつ一時期である。彼は第一次大戰まで、パリを彼の生活の根據にした。すでにリルケの周圍には、多くの友人、保護者、助力者があつまつてゐた。彼はたえずスイス、ダルマチア、スペイン、イタリア、スウェーデン、ドイツの各地をおとづれた。そして、彼はいつもパリへ歸つてきた。わが巢にもどる小鳩のやうに。一九一四年の夏、リルケはドイツを旅行中、不幸にも世界大戰の勃發に遭遇した。まもなく召集を受け、ウィーンの陸軍事務局に勤務した。しかし召集を解かれた彼は、しばらくミュンヘンに移つて戰爭の苦難な生活に耐へねばならない。一九一九年、戰爭が終ると同時に、リルケは戰爭の災禍から殘された唯一の國といふべきスイスへ行つた。戰爭の四年間は、おそらくリルケが最も苦しみ、最も艱んだ時期かもしれぬ。傷いた小動物のやうに、リルケはスイスの各地を放浪しながら、容易にむかしの安靜と平和を恢復することができなかつた。だが、一九二一年、偶然の機會が彼にミュゾットの館をめぐんでくれた。ミュゾットはリルケの「終の栖」である。「あなたのちひさな古いシャトオは、悲しげな山々の頂をのぞむ打ちひらけた風景のなかに、おほきな寂寞につつまれて立つてゐた。深い瞑想に打ちしづみ、古い時代のさびに老い朽ちてしまつた部屋の、ふるぼけた調度やせまい窓。容赦なくそれがぼくの心をしめつける。ぼくはあなたの心の內部で孤獨な意識がつぶやく長いモノローグをきいた。自己の中心から、自己だけを信じる堅固な感情から、あくまで何ものにも隔てられまいとする、孤獨の意識をぼくは考へた。ぼくはもはやこのやうなわびしい生活の可能を考へることができない。永遠の冬にとぢこめられた、この靜寂との極端な親和。このおびただしい孤獨な夢と瞑想の時間。およそ書物といふ本質的な極度に押しつめられた精神と、變幻きはまりない文字の不可思議な力と、あらがひ難い回想のながれに對する、このやうな率直な開放。親愛なリルケよ、あなたは純粹な時間のなかに閉ぢこもるかとみえた。一日一日、おなじやうな日

をあかず並べて、そのむかうに『死』をのぞかせておくやうな生活の透明さを、ぼくはふと怖ろしいとおもつた」と、リルケをミュゾットにたづねたヴァレリイが書いてゐる。リルケは一九一二年以來の重たい課題だつた「ドゥイノの悲歌」(一九二三年)を、やうやくミュゾットの靜寂と孤獨のなかで完成することができた。と同時に、思ひがけなく贈られた幸福のやうに「オルフォイスに捧げる十四行詩」(一九二三年)が生れた。晩年を代表するこの二つの詩集は、およそポエジイの極北といつてよいものだらう。カスナーの言をかりていへば「藝術による藝術の克服」である。しかし、その後、リルケはひどく身體をこはし、一九二三年と一九二四年は、モントルーにちかいヴァルモンで療養に專念した。リルケがこの世を去つたのは一九二六年十二月二十九日午前五時であつた。

リルケとともに現代ドイツ抒情詩の山巔といはれるゲオルゲは、明確なフォルム、堅固なものへと、次第に自己を凝集させ結晶させていつた詩人である。そして、彼の究極の目的は、ゆるぎなき「ドイツ國土」をきびしく自覺し、堅固な精神の「ドイツ國家」を打ちたてることだつた。しかるに、リルケは生來「故郷」を持たなかつた。むしろ彼は、あらゆる故郷とのつながりを斷たうとねがつた。彼は孤獨をもとめ、杳かさに誘はれた。リルケが目ざしたのは、神の「杳けさ」である。あくまで純粹な理想に生きようとしたゲオルゲは、むろん孤獨だつたが、その孤獨はいはば理解されぬ英邁な國王の孤獨に似てゐた。リルケの孤獨はまづしい聖者の孤獨である。果てしのない曠野のなかで、ただひとり神を祈る獨居者の孤獨である。彼はすべてに自己をあけひろげてゐた。そして、あくまで孤獨だつた。リルケはただ「純粹な聯關」のなかに生きようとした。

パリ時代はリルケの藝術の成熟期である。ロダンが彼の畏敬する藝術の師であつた。(「ロダン」第一部一九〇三年、第二部一九〇七年。)リルケは「見ることをまなぶ」といつた。究極まで見るといふことは、究極まで考へることである。すなはち、見ることが深い「神の思念」にほかならぬ。そして、敬虔に一箇の「物」をつくること——

「仕事」が、藝術家の生活であらねばならぬ。

やるせない病人のやうに
詩人はかなしみの言葉をつぶやく
詩人はなげきや痛みをもらす
しかし　カテドラルの石工は　默つてただ脣をかみ
堅固な石の沈默にすべてを打ちこむのだ
かたい切石のやうな言葉にわれとわが身をきざむこと……

リルケによれば、詩もまた一箇の「物」であつた。「物」は「仕事」から生れる。仕事は、たとへ何をつくらうと、つねに不變な、おなじ繰りかへしの手のはたらきでなければならぬ。顏面も手足も胴體も背面も、すこしの恣意な選擇をゆるさぬのだ。そこにはもはや名まへすら介在しない。あくまで謙虛に、ただ獻身的に、丹念な眞摯な仕事があるばかりだ。どのやうなものが自分の手につくられるかもわすれ、藝術家はひたすら一心に、まるで蟲けらのやうに、暗黑のなかを一寸一寸穴を穿つてすすむだけである。「およそ『物』は最も明確なものでありますが、藝術の『物』は一そう明確でなければなりません。あらゆる偶然をはなれ、あらゆる曖昧をさけ、時間を去つて空間に歸すべきです」とリルケは書いた。このやうな態度をつきつめたのが「新詩集」の作品である。だから、第二部には「偉大な友、オーギュスト・ロダンに捧ぐ」といふ獻辭が書かれてゐた。「新詩集」のリルケの詩は、ほとんどがいはゆる物象詩である。リルケは噴水や伽藍を、べに鶴や豹やあぢさゐを、一箇の「物」として歌つた。もはや人間や人間の別離さへも、リルケの眼には「物」であつた。そしてリルケは、それらを一箇の藝術の「物」として存在させるために、言葉を素材として「造形」するのである。カロッサはこのやうなリルケの新らしいポエジイの方法を「これはもはや『無

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

邪氣に歌ふ自然』を喪失した精神である。むしろ、つよい精神の意志が、たましひのレンズをとほして、すべての光を一點に集中し、ふいに音たててその焦點を燃えあがらすのだ」と書いた。

「時禱詩集」第三部が完結したのも、やはりパリである。この詩集は、一人の近代人が一個の人間として神と對決する記錄である。あらゆる教會のドグマをはなれた純粹に宗教的な思念の結集である。ここには教會的な宗教禮拜もなければ教會的な信仰告白もない。しかもリルケは、神の「内在」と「超越」、生と死、外部の虚飾と内部の眞實、倨傲と敬虔、人間の貧しさと富について、深く掘りさげてゐる。リルケの言葉と思考は、螺旋のやうに、回歸しながら無限の深まりに達するのだ。

「マルテの手記」(一九一〇年)はリルケの書いたほとんど唯一の長篇小説である。「ときどき、ぼくはこの小説を書きあげさへすれば死んでもよいと思つた」といふやうに、「マルテの手記」はパリ時代の總決算だつたと言つてよいかもしれぬ。むろん、マルテは作者であるリルケその人ではないだらう。「マルテの手記」は自傳小説でもないし、モデル小説でもないのだから。リルケはあくまできびしい、堅牢で、隙間のない散文を書かうとねがつた。だから、リルケは嚴密に「手記」としての形式をまもつてゐる。この小説は、マルテの遺稿として殘された斷片的感想、備忘ノートの切れはし、散文詩のフラグメント、過去の追想、眼前屬目の風物描寫、日記、書きつぶしの手紙などを、ただ何の序列もなくあつめたのにすぎぬ。「こんな小説は藝術的にみれば、でたらめな、すきだらけの構成にちがひないが、ぢかに人間的なものに觸れるためには、結局ゆるされる形式かもしれぬ」といふ意味をリルケは語つてゐた。たしかに、何のつながりもない箇々のエピソードや斷片から、マルテといふ一青年作家のいつはりのない生活やその途方もない内部體驗の大きなひろがりが、ぼくらの目のまへに浮び出てくるのである。この小説には、ほとんど事件らしい事件、物語らしい物語は、何も書かれてゐない。ただ小説全體がいはば「不安の交響樂」である。リルケは「生」

と「存在」の問題を、最後まで考へ、最後まで見きはめようとした。そして、マルテといふ人物を「生」のぎりぎりの場所（「死」のすぐ隣り）に立たせてゐる。パリの街區のあらゆる不安、汚濁、恐怖、絶望などが、あたかも病原菌のやうに、容赦なくマルテの心身を蝕ばむのだ。もはやマルテは、これ以上、生きることができぬかのやうにみえた。と、その絶望の底から、かへつて一つの決意がうまれ、「生」と「死」をむすび、眞實な愛への、純粹な神の存在への、長い杳かな道がひらかれる。小説の結末では、聖書の「放蕩息子」の傳説がとりあつかはれてゐた。マルテはこの傳説を「愛を拒絶した人間」の物語だと解釋する。純粹な愛は、愛せられることではなく、ただ一途に愛することでなければならぬ。そして小説は、次のやうな言葉でむすばれてゐる。「彼がどのやうな人間であるか、ちつとも人々は知らなかつた。すでに彼を愛することは、途方もない困難なことになつてゐたのである。ただ神のみがぼくを愛することができるのだ、と彼はほのかに思つた。しかし、神はまだなかなか彼を愛しようとはしないらしかつた。」

　咲きこぼれた薔薇のはなのやうに、容赦なくすべてを外部にむかつて開きながら、あくまで靜かな中心に、無垢の孤獨をひしとつつんでゐるリルケ。この道は、その後十年の沈默と靜寂に耐へてやうやく生れた「ドゥイノの悲歌」と「オルフォイスに捧げる十四行詩」にそのままつづいてゐる。だが、リルケの仕事はもはや「手の仕事」ではなかつた。リルケは「心の仕事」を目ざさうとした。「悲歌」や「十四行詩」は內面の純粹と切なさを極度に押しつめた作品である。リルケの詩は、すでに單なる感性の抒情を越え、こまやかな音樂性から蟬脫し、最もきびしい言葉の造形へ高まつてゐる。生命の脆いはかなさと永遠な持續、目にみえる外部と目にみえぬ內部、完璧な怖ろしい天使と未熟な靑い果物のやうな人間、一箇一箇のリアルなものと「存在」そのものの深さ、それらは對立し矛盾しながら、同時に「全一」なもののなかに流れ入り、溶けあひ、まじり合つてしまふ。リルケはそれを「宇宙の內部空間」と名づけた。すなはち、言葉をかへると、「純粹な聯關」である。永遠の「存在」である。もはや「死」は「生」の終末でも否

定でもない。かへつて、「生」の高まりと完成が「死」であつた。「生」と「死」は一つであり、「存在」のそれぞれの半面でしかないのだ。「大地よ、おまへの切ないねがひは、目にみえぬものとなつて、ぼくらの内部によみがへることではないのか。いつか目にみえぬ不可視なものとなることが、たぶんおまへのうつくしい夢だらう。大地、もはや目にみえぬ大地」とリルケは歌つた。人間は不可視なものをせつせとあつめる蜜蜂である。生活と自然から、人間はちひさな蜜蜂のやうに、ありとあらゆる蜜を、ありとあらゆる意味を、とらねばならぬ。詩人は言葉のなかに「存在」をあつめ、見えない世界へ、純粋な内部空間へ、すなはち永遠の存在へ、しづかに運んでゆくだらう。それゆゑ、一度「死」を體驗したオルフォイスが「十四行詩」において、詩人といふものの象徴的神話のすがたとしてあらはれるのである。オルフォイスは「生」と「死」を自在に出入した。彼は常にぼくらの世界と、同時に「彼岸」を見とほしてゐた。

「悲歌」は十篇、「十四行詩」は五十五篇。いづれも一貫した連作である。この詩形の完璧、成熟、充實が、リルケの全作品の終結であつた。ここには不思議な「純粋」と「偉大」の一致が、亡びない光明となつてかがやいてゐる。あらゆる對立と矛盾は消えた。リアルなものと「存在」との目にみえぬ微妙な聯關が語られた。たぶんそれは、戰爭の苦難がリルケにもたらした最後の解決だつたのかもしれぬ。リルケはすでに多くのものを脱ぎすててゐた。彼の詩は、ポエジイの甘美な夢やまぼろしから離れて、どこまでも對決と決意にむかつてのぼつてゆく。ハイデッガーはヘルダーリーンに倣つて「この貧しい時代に、詩人は何のためにあるか」と問うてゐるが、リルケの詩は最も誠實な解答であらう。カスナーはリルケの世界は「空間」の世界だといつた。リルケの世界には「時間」がないかもしれぬ。從つて「歴史」がないかもしれぬ。しかし、すべてにむかつて何の惜しげもなく大膽に身を打ちひらき、しかも自己のたましひのまはりにほのかな孤獨の灯を點じたリルケの「存在」は、何だらう。やはりカスナーのいふごとく、リル

ケの作品は「藝術による藝術の克服」だつた。ぼくらはもはや安穩にリルケの詩を「審美的」にのみ讀むことはゆるされぬ。「後期詩集」（一九三四年）のかずかずの詩もまた、さういふポエジイの極北をはつきり指し示してゐるのである。

大山定一

目次

マルテの手記……大山定一譯……一七
短篇と小品
純白の幸福……大山定一譯……二三
聲……大山定一譯……二七
和む……大山定一譯……三一
「神さまの話」より
石に耳を傾けるひとについて……谷友幸譯……三八
指甲が神さまとなるにいたつた話……谷友幸譯……三三
乞食と氣位たかい少女……谷友幸譯……三九

夢――第七夜――……堀　辰雄譯……二四六
犬――或る邂逅――……大山定一譯……二四八
體　驗……富士川英郎譯……二五三
人形について……高橋義孝譯……二五七
神について――若き一勞働者の手紙――……大山定一譯……二六五

藝術評論

風景について……大山定一譯……二八二
ヴォルプスヴェーデ……谷　友幸譯……二八八
ロ　ダ　ン……石中象治譯……三〇五

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.